

流離の記

江夏美好

流
離
の
記

江夏美好

河出書房新社

流離の記

昭和五十年六月二十五日 初版印刷
昭和五十年六月三十日 初版発行

著者 江夏美好

発行者 中島隆之

印刷者 矢部富三

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三の六
電話東京〇三三二九二一三七一一
振替 東京 一〇八〇二

定価は帯・カバーに表示してあります

目次

流離の記……………	3
天狗の女……………	167
一木一草……………	201
あとがき……………	241

流離の記

水戸浪士西上日記数冊のうち、無名のもの
二、三本あり。終りなきあり、始めなきあ
り。精あり疎あり。

敦賀町人拾いたる由にて出候日記、落ち散る
べき筈なれば、日雇など貰いしものなるべ
けれど、後患を恐れての詞ことばなるべし。

是また無名にて、日記の畢りに「流離の果、
此日記のみ残る」とあり、由って「流離之
記」と名付く。

十一月十二日

雨降りやまず、太田宿に滞留。

滞留という文字は、あとで出立と書きなおさねばならぬかもしれない。いまのところ戦いの気配はなかった。けれど、出立の命令はいつ出ないともかぎらない。

筆をおさめて志乃はつぶやく。「そう、この雨があがれば……」

矢立は戦死した叔父相馬進之介のかたみの品、手帳は和紙を二つおりにとじた懐中用のもの。この和紙は指で揉みほぐすと、ほっこり毛羽だつ。下着にしほせれば、寒気をふせぐのに役だつたため、持参したものであった。

この日、天狗党の本陣は大光院新田寺であった。徳川家

康が慶長十六年に、呑竜上人を開祖として建立したもので、呑竜さまとも呼ばれている。本陣には約半数の四百人が泊り、あとは附近の家々に分宿。女たちにあてがわれた寺の別棟は、庭に茶褐色の苔があつく敷いていた。屋根も草ぶきで、雨の音は吸い消されている。

午をまわったばかりというのに、坊子畳の敷かれた部屋はうす暗い。雨のせいと、庭に面したすすけ障子が、採光をわるくしているためである。

いったいわたしは、雨のあがるのをまっているのだろうか？ と志乃は考えた。たしかに一刻も躊躇しているときではないとおもう。けれどこのまま、休息の時間がつづいてほしいとも願っている。たとえかりそめのものではあったにしろ、志乃は平穏な時間がほしかった。もっともこれは志乃一人ではなく、三十一人の女たちの共有する願いであるにちがいがなかった。

かつては平和な日もあった。もはや遠い昔のような気がするけれど、つい三カ月ほどまえのこと、戦死した叔父の遺品のこの矢立が、叔父の書棚の奥ふかくしまわっていたころである。

水戸藩は徳川御三家とはいえ、尾張や紀伊とはくらべよ

うもないほど貧しいお国がら。領地が少く、したがって産物もとぼしい。まして駿河大納言や北条氏照の旧臣、甲州武田の族や、佐竹や今川の殘党に、肥後熊本に加藤家の遺士など、いわばよりあい世帯ではじまったものだけに、藩の分裂さわぎは、創藩時代からの、三百年の歴史をもつという。

さらに、藤田派（天狗党）立原派（諸生党）の学問上の対立が、政治問題にまで転化したのであったから、水戸に住んでいる人間に、いつの日もまことの平和はあり得なかつた。とはいえ、そのころの志乃は平和であった。血で血を洗う騒動のおきないうちは……。

志乃は息苦しくなつて顔をあげた。さきほど本院へ、朝餉ぬきの昼食に出かけたとき、まっすぐに降りそそぐ秋雨は、みぞれでもまじりそうで、外気は申しぶんなくつめたかつた。だのに、とじこもつた女の熱気で、むせかえりそうである。

膝をずらして、志乃はおもひ障子戸をすこしあけた。苦むした石燈籠が見え、つめたい外気がながれこんだ。

とたんに、「おしめなされよ」と隣にいた卯女に声をかけられた。

卯女は五十七歳。二十八歳の志乃とは母娘ほとんど歳がちがう。卯女のおだやかな眼差しがほほえんでいる。志乃は素直に戸をしめた。

そのとき、「ちよつとぐらいよいよでしょうが」といった女がいる。小やであった。彼女は髪を梳く手をとめて、「行軍中はただ夢中に歩くだけで、まわりの景色をながめることもできなかったじゃないか」

「そう、わたしだつておなじよ」と、その隣の女がいい、「戸ぐらいあけたつてべつにどうのこうのと……」と、語尾をくぐめた。小やと仲のよいたねである。

つかつかと立ってきて、障子に手をかけた小やの袖を、卯女はしずかにおさえた。

「なぜ、なぜだめなのさ？」

小やが強い口調でいい、卯女はいつもの微笑の顔で、だまって首を横にふつた。

小やは瘦せた女であった。歳は三十前後であらうか。あさぐらい頬の肉がこけ、つりあがり気味のほそい眼をしていた。彼女は障子をあけることを諦めたものの、その眼に忿懣の色がかくせなかつた。眉をしかめ、舌うちし、強く首をふつた。胸にたつぷりかかえていた髪が、さつと背に

なびいた。

小やの背へと走る髪が、その毛先が、志乃の頬をびしつとはいた。汗のくさみと、かすかな香油のおいがした。

小やの無礼はいまにはじまったことではない！

常陸国那珂郡^{なかに}河津を出発したのは、元治元年十月二十三日。

あれから二十日も行をともしながら、たがいに相手をよくしてはいない。女たちはみな、西上する天狗党隊士の妻や母であつたけれど、武家育ちの女といえ、卯女に志乃に、赤児づれの加代のほか、五、六名である。

町家や百姓出身の女たちは、やはりもと武家の女に一目おいた。はじめはおずおずしていた。いまでもおびえている。遠慮している。こちらから積極的のうちとけようと努めれば努めるほど、いじけてしまつたものであつた。

小やは、町方や百姓出の隊士の妻ともちがつた。彼女は仲よしのたね同様に、荷駄の雇われ人足の女房らしい。そしてそれが劣等感となつて働きかけるのであろうか、誰彼の見さかしくつかかりなにかといやがらせをしてきたものである。

小やがでんと音をたてて坐つた。気まずい沈黙がつづく。卯女はそしらぬふりで、指先の輝^{あざ}に膏藥をぬりこんでい

た。

すみでうすい蒲団にくるまっていた老女が、一座の沈黙をやぶつた。

「障子はきちつとしめといてくださいや。赤ちゃんが風邪をひきまずでな」

老女は仲間のうちの最年長者で、たしか六十八歳といつた。齒のないつぼんだ口もとをしていても腰も曲らず鬢^{かみ}鎌としたものであつた。この老女の起居ふるまいも、もと武家の女のものであつた。

老女といえはもう一人いた。瘦せて小柄な老女の方を、仲間には小さな婆さまと呼ぶ。小さな婆さまはなかなかの信心家で、耳の遠いせいもあり、こんなときでも壁にむかつて合掌し、なにかぶつぶつ唱えていた。

「赤児じゃなくて、大きな婆さまが風邪をひかれるからでございませう」

といつたのは当の赤児の母、加代^{かよ}である。彼女は十七歳、仲間うちでの最年少者であつた。そばかすの浮いた色白なわらべ顔は、歳よりも稚く見せている。

「そのことそのこと、婆も赤ちゃんも風邪をひきまず。それにこうして休養のとき、油断につけこむのは風邪の神

と、敵の伏兵ばかりじゃござんせん、女はなにしろ罪ぶかい生きものですからな」

老女は齒のない口をまるくあけて笑った。

とたんにまわりの女が声をひそめて笑う。歳ごろは志乃と前後の女たちであった。笑い声は微妙なくすぐりの効果をもって、つぎつぎつたわってゆく。ついででしたがたの氣まずさなど、信じられないようである。

隊には「婦女子をみだりに近づけぬ事」の軍令条が徹底していた。その軍令条にまもられて、夜も安心して眠れるのだと、一人がいう。誰かが黄色い声をあげた。

「なにしろ勇敢な男衆が九百人で、わたしたちをまもっていただくさる。九百人もでね」

ひょうきんな調子につられて、誰かがまたくすつと笑った。他の女もしのびやかに笑う。

志乃は女たちの故意にひそめた艶っぽい笑い声が気になった。にわか周囲の空気までが華やいで、女たちの皮膚からにじみ出る汗や体臭が、熱風のように志乃をおしくるんでしまう。志乃は眼くらめくほどの惑乱に、つらいなあと身をすくめた。

女たちはみな一度は妻の座にあった女たちばかりである。

そしていまなお、妻の座をうしなうまいとしてこそ参加したのであろう。けれど志乃はちがった。

かつて志乃は、自分をうとましいとおもった。皮膚に爪立てたいほど、自分を憎んだ日もある。男への思慕や恋情は、いつも敵爾そのもののくせ、日々が地獄であった。

そしていま、女たちのやわらかな咽喉ひだをくすぐって、艶やかにひそめた笑い声が、志乃の耳に怒号になってひびく。

次第におおっぴらになってゆくさざめき、笑い声。話術の得意な女が膝を乗りだす。隣の女がうけてこたえる。

「天は二物をあたえずというでしょうが」

「そう、どうせ破れ鍋にとじ蓋よ。まずはお似合の夫婦だね。少々不足でもがまんなさいよ」

「おや、がまんなんてよくいえたこと」

「といつてもがまんが第一。いまはとくにがまんがだいじだよ」

「なにさ、みんなおんなじじゃないか。にわかづくりの後家さんぞろいじゃないかね」

はじけるような笑い声のなかで、小やとたねだけは不機嫌である。それに五十年配の伊佐も無口な女で、壁にもた

れて瞑目して、たねと喧嘩友だちのきくも、壁にもたれて爪を噛んでいる。

志乃は女たちに距離を感じた。困惑しながらこんな話を歳の若い加代がどんな関心できいているだろうか考えた。

加代はかぞえて十七の若さで、生後五カ月の赤児の母であった。結婚と懐妊。十月十日の妊娠の苦しみに、出産の痛苦。きつと彼女は、肉体の苦痛以外を記憶にとどめていないであろう。夫婦の営みも、おごそかできびしい儀式としかうけとれなかったにちがいない。

連日寝食をともししていても、もとの生活や環境がちがった。話題もおのずからちがう。みんなに共通する話題がない。心のなかにわだかまる不安をわすれるためにも、つまらないお喋りに熱中した方がよかった。浮きつ調子な男と女の話には罪がない。もとの生活や環境が異なるだけに、おもしろい。

それでもこうした話題に志乃はこまった。卯女が笑顔で相槌をうっているのまでが、こまるおもいである。

ところがその卯女が突然に、「こまりますよ、そんな話！」と、強い口調でいった。

座が白けた。卯女自身があわてて、

「だって、わたくしの息子源七のように、からつきしねんねの隊士もいますからな。それにまたわたくしのように、正真正銘の後家のいることもわすれないでくださいよ」と、とりつくりつた。

「ああなるほどね。にわか後家はやっぱりがまんがだいじだよ」

一人がおどけてこたえ、白けた空気をとくほぐした。

「どうなされてか？ お顔色がわるいようですよ」と、卯女にいわれ、ちょっと気分が……と、志乃はあわてた。

やはり秋の雨はこたえるからだと卯女がいった。緊張して行軍しているときは、少しも疲労をおぼえないのに、こうしていると足腰がびきびき音立てて痛むようだともいう。

志乃は卯女のうしろにまわって、彼女の肩を揉みはじめた。卯女の肩は幅がひろい。骨もふとい。がっしりして、肉のふくらみが感じられず、志乃は卯女という女の、きびしい越方を、指先でさぐりあてるおもいであった。

「ほんによい気持……」と、卯女はよろこんだけれど、志乃は一度もひとの肩を揉みさすった経験がない。幼時に実母に死なれた。継母とはなじめず、嫁いでもからも姑は肩を揉むことをよろこばなかった。ただ実母の弟、相馬進之介

の肩だけをときどき揉んだ。揉むというより書見している叔父の肩に両手をとまらせ、泪ぐんだ記憶だけがかたしい。

本堂には隊士たちがあつまっていた。個々の声はきこえず、うわおーんと空気が震動しつづけている。寺院特有のしっとりした抹香のにおいは消され、あらあらしい人間のくさみにみちている。人間というより、獣の臭気に近かった。

私たちの夕食には、書院の間があてがわれた。昼のときとおなじである。床には山水の軸と、活けられた黄と白の小菊。そしてこの障子は白かった。どうやらこの書院だけが、いまなお静謐な寺の領域をまもっているようである。女たちはおちつけず、糸の切れた袖口をひっぱったり、そろえたたっつけ袴の膝をなでたりした。

黒ぬりの平膳に汁一椀。たくあんは井にもられてのつきだしである。

ひえた粟めしは、どんなに気をくばっても椀のふちからこぼれおちる。肘と肘がぶつかりあうほどに隣りあって坐っている、ことさら注意が肝要で、椀を口からはなさず箸でかきこむ。

食事が終わった。

「このまましばらくまっておられるようにとのことです」と、膳をさげにきた寺男がいった。

膳が片づけられ、畳にこぼれた粟つぶを、二人の老女が指をなめてはひろいとした。

「粟めし炊くには火をおとすとき、澱粉^{澱粉}をちいっと水溶きして入れてみなさんせ。さめてからばらつきませんぞな」
耳の遠い小さな婆さまの耳もとで、大きな婆さまが尻あがりの水戸なまりで繰りかえした。

難聴のひとは、自分の発声の勘も狂うものらしい。「なるほどなるほど、まことに妙案ですな」と、見当はずれな大声で小さな婆さまはこたえ、「そのかわり、腐りもはようござんせんか？」

大きな婆さまは苦笑して顎をひき、「わしが家では、腐るほどもたいそうなごぜんは炊かんことにしとります」

女の生活の智慧は、まず食からはじまる。女たちが甲斐甲斐しく働いたことといえ、去る二十五日から五日間、常陸国太子村での滞留期間であった。

月折峠の頂上から、追討の市川勢や新発田藩^{しんぱつだ}のうちだす大小砲や、ころげおとす石のため攻撃もままならず、隊士

の一人が戦死した。負傷者もたくさん出た。女たちは怪我人の看護や、兵糧づくりに精をだした。

あのとき志乃は、やすみなくこしらえるにぎりめしで、しまいには掌を赤く火ぶくれさせた。それでもひりひりほてる掌で、隊と自分との完全な融合を感じる事ができたものである。力がみちた。勇氣にあふれた。生甲斐を感じ、ひどくうれしかった。

他の女たちの働きも目ざましかった。とくに仲間の指図役のつもりでいた大きな婆さまなどは、牝鶏のあいだで翼をひろげた牡鶏ほども、得意そうで、いそがしげであった。というのに、いまおなじ老女の口から、「粟ひとつぶでも気がねなおもいで……」といわせるのはなぜであろう。

夜になれば、女たちの宿舍のまわりに歩哨が立つ。戦いははじまれば、まず安全な場所へ退避させてもらう。行軍も足弱なためにはかどらない。これではもはや、隊の足手まといにすぎぬようである。それでも女たちは、愛するもののためについてきた。そしてこれからもついてゆくであろう。

志乃には親も夫もいなかった。志乃のもっとも愛した叔父も、湊の激戦で戦死していた。けれど眼をとじれば、志

乃の臉に、一人の男の像が浮かぶ。彼は志乃より四つ歳上であった。眉がふとく、眼光のするどい男である。けわしい眉や眼をやわらげるのは、ゆたかな頬と小さな口もど、顔の上半分はきわめて男性的、下半分は女性的な線をもつ男、安藤彦太郎であった。

かつては夫と呼んだ男を、志乃はいまなんと呼べばよいのであろう。親や異母弟にそむき、当の彦太郎にまで反対されてついできたのである。

「おれは天狗党に命をかけている」

と彦太郎はいった。湊を出立まえの、あわただしい一刻の再会であった。彼の言葉に志乃は涙をながした。うれしい言葉であったのだ。それでも、わたしはあなたに命をかけているとはいえなかった。

「なぜついてくるのか。おれは妻のりつが参加するのさえやめさせたんだ。女なんぞは隊の行動にかえって迷惑だからな」

彼は眉をしかめて吐きだした。眦をつりあげて、勝手についてくるがいいといった。

「しかし、おれのせいじゃないぞ。おれとは赤の他人だ！」

「赤の他人ですって？」

「そうとも、覆水盆にかえらずだ。二夫にまみえぬ貞女ぶりを鼻の先にぶらさげて、おれのまえをうろちよろするのだけはよしてくれ。じつに迷惑千万だ！」

言葉をうしなつて、志乃は肩をふるわせた。

彦太郎は書院番につとめていた叔父の輩下であった。叔父はこの聡明な若者を愛し、なにくれとなく気をくばった。彼もまた叔父を信頼し、尊敬していた。

叔父の家に出入りする志乃と彦太郎のあいだに、美しい恋が育った。二人の結婚をこの上もなくよろこんだのは叔父である。肩の荷をおろしたと叔父はいった。叔父、姪といつても、八つちがいである。兄妹のような愛情、いや、兄妹以上のこまやかな感情が、いつも二人を支えてくれていたのである。

志乃の父、田村喜平次は表祐筆をつとめていた。物質的にめぐまれた生活とはいえないまでも、貧苦の悲哀を知らなかった。けれど精神的な貧しさは、幼い身も心もいびつにゆがめてしまったものである。

継母は志乃のいたずらに、一度とて声をあげたことがない。父のまえでは、「わたしがいたりませんものですか

ら」と泣くむくせ、志乃一人のときはひややかな眼でらむ。だまっただまま志乃の手足を、いつもきゅっとつねったものである。

志乃の小さな腕や膝には、紫色の痣が絶えなかった。つねられたあとの皮膚は、いつまでもほとほと燃えた。熱が消えてから、くっきりした痣になった。着物の上から痣をおさえては痛みをよみがえらせ、志乃は六歳の幼少なりに、女としての継母の妬心と欺瞞をしっかりとめた。父には告げなかった。父はいつも継母の味方であったから。

志乃の心からの味方といえ、近くに住む母方の祖母と、当時十四歳の少年の叔父進之介であった。上の兄と姉を幼時に麻疹でうしない、のこった一人の姉をまたうしなつた傷心の叔父は、少年らしい誇張した悲壮感で志乃をいたわってくれた。志乃もまた、父の眼にふれることのない太腿や二の腕の痣を、祖母や叔父には着物をめくって見せ、「いたくても泣かないの」と、涙をぼろぼろこぼしたものであった。

志乃はこの祖母についてかな文字からの書を習い、孝経の句読からの手ほどきをうけたのであった。「おなごに学問をさせれば、不縁のもとと昔からいわれている」

と、父はにがりきり、水ききのあと美しい文字こそよけれどといった。女文字を書けない女は情緒にとぼしい、が口ぐせであった――。

祖母と叔父に祝福されて、志乃は彦太郎のもとに嫁いだ。結婚生活も四年たつの子ができなかった。三界に家ない女が石女いしめよでは、婚家を追われるのが、家の条理とされている。

「わたくし、もう諦めました。いずれは養子でもむかえて……」

「養子だなんておれはいやだ。おれは親たちの晩年のひとりっ児。孫の顔見たさに生きている年よりを、安心させる子としての義務もある。おれはおれの子にこの家を継がせたい」

憑かれたように彦太郎の眼がぎらついた。

「おれは自分の子がほしい。といっておれのような微禄ものが、妾、手かけのたぐいから子を得ることもできぬではないか」

といいつのる夫にむかって、志乃はもはや言葉もなかった。子のできぬのは、一方的に妻の悪徳であり、欠陥とされてきた。はては、老いた両親の逝くころには子もできて

いよう。つらくてもそれまでの辛抱だ。かならずおまえを呼びもどす。その証拠には、領内一の醜女を妻にするとまでいう夫。志乃は彦太郎の言葉を信じた。つらい別離であった。

彼は再婚した。あたらしい妻は、彼よりひとまわり余も若かった。

志乃は自分たちのために子袋を用意してきた女を垣間見たことがある。領内一はおおげさにせよ、色の黒い出っ歯な女で、器量がわるかった。志乃に嫉妬の感情はなく、むしろ女をあわれとおもったものである。石臼のように腰部が発達し、いかにも子を産むために、生きてきたような女であった。

ところがりつと呼ぶ、二度目の妻にも子ができなかった。再婚二年目で孫の顔も見ずに、老夫婦が相ついで他界した。志乃はだまってまっていた。彦太郎の言葉を信じてまった。彦太郎はりつと別れる気配がなかった。そして志乃の両手をとり、「家の犠牲になる悲劇的な夫婦ではないか」だの、「生木を裂くとはこのことだ」と、涙をこぼしたことなどわすれた顔で、志乃を冷然と見おろし、覆水は盆にかえらずなどと、けろっといったのけたのである。

志乃はくやしかった。血が逆上しそうであった。それでも彼を憎めず、

「わたしはあなたにご迷惑をかけようなどとは……いえ、わたしは叔父の仇を討ちたい一心で、ついできたのですから」といった。

彼の顔に皮肉な笑いが浮かんで消えた。

「なるほど、いやあんたはなかなかりっぱな同志だよ」

吐きすてた彼の賞讃は、同時にこの上もない侮辱なのでもあった。

「もうちいっとそっちによつてください」

卯女に促されて、志乃はわれにかえつた。女たちが声もなくざわめいている。いままでの円陣をくずし、襖の方に向かつてならんだ。

襖がひらかれた。百匁目蠟燭のならんだ隣室は、一段と高くしつらえられた畳の間。やがて廊下を鳴らして、総帥の武田伊賀守がはいってきた。つづいて本陣の田丸稻之衛門に軍師の山国兵部、補翼をつとめる藤田小四郎である。稲之衛門はかるく跛をひいている。月折峠の合戦で流弾に太腿をえぐられ、駕籠に乗っての道中であつた。

はじめ波山勢とも呼ぶこの天狗党の総帥は稲之衛門であ

つた。伊賀守が合流して、藩の元老としての地位や名声から、一軍の総帥に推されたのである。

伊賀守は経典などならんだ書架を背にして坐つた。六十歳。背が高く瘦せていた。鼻梁がけわしいほど高く、青白い面に瘡瘡のあとがあるため、おそろしい感じである。

弁舌はさわやかで、女にでも納得のゆく話しかたをするひとであつた。

あすからはもつとつらい行軍がはじまりましよう、と伊賀守がいった。

「あなたがたご婦人は、この日までわれわれをよく扶けてくださった。またわれわれもみなさんをかばうように意をつくしてきましたが、九百人もの隊が秩序ただしい行動をとることは、なかなか骨のいる仕事、これからはあなたたちへの配慮も、とかくゆきとどきますまい。それで、もしや離隊の希望あるかたがおられたなら、この際申し出てください。呑竜さまに身のふりかたを依頼する方便もあり、路銀のはなむけも、いまのうちなら用意できましよう」

一瞬、女たちはしゅんとしずまりかえつた。とうとうくるべきものがきたとの悲哀が、どの女の胸にもうずいたのだ。みんな首をたれてふかい吐息をついた。涙をすすりあ